

はしっこ

ポリフォニックなプロセス+プレッシャー

2020年5月17日（月）ー5月29日（土）10:00-18:00（日曜休み）

企画/会場：はしっこ

フライヤーデザイン：川村格夫（ten pieces）

協力：カフェノーザンライト、三沢厚彦、EUKARYOTE、XYZ collective

※新型コロナウイルス感染症の今後の拡大状況に応じて会期が変更となる場合があります

拝啓、時下ますますご清祥のこととお慶びを申し上げます。

この度、5月17日（月）から29日（土）まで、実験スペース「はしっこ」にて、

展覧会「ポリフォニックなプロセス+プレッシャー」

を開催いたします。是非とも新聞、雑誌、メディア等にてご紹介頂きたく、ご案内申し上げます。

この展覧会は、私たちが美術という言葉を意識する前に既に経験している「美的な何か」との出会いを「同時多発的な複数の自己との出会い」と捉え、作品制作と展示、鑑賞を通じて、その出会いについて考える試みです。【9名の画家、彫刻家による頭像（首像）】と【3名の画家、彫刻家による絵画、ドローイング、映像による肖像】の二つの展示を組み合わせ一つ展覧会とします。私たちに既知なもののひとつである頭を様々な視点、角度から出現させる頭像（首像）彫刻をポリフォニックなプロセス、壁（垂直面）から私たちに向かってくる肖像を、技法という声帯を通した音圧=ポリフォニックなプレッシャーと仮定し、「自己の中で分裂した複数の声と対話をする方法、技術としての美術」を考察するひとつの機会とします。

当方では、プレス用画像をご用意しておりますので、お気軽にお問い合わせください。

はしっこ

〒187-8505 東京都小平市小川町1-736 武蔵野美術大学（2号館2階 彫刻学科 富井大裕研究室）

アクセス <http://www.musabi.ac.jp/access/>

或る大学構内の端にあるスペース。端とは出発点として個人が設定できる始まりの地点であり、工夫と行動によって中心とは「別の中心」となりえる場所である。充足した空間でも保証された舞台でもないが、思いつきが故の機動性と熱量によって「必要かもしれない」ことを試みる。試みたことを公開（目撃）すること。そのことを効果として捉え、持続すること。以上のことは当然のことであり、特別なことではない。それ故に行わなければならない。表現は端や際から創出される。

広報に関するお問い合わせ：富井大裕 tomiimotohiro@gmail.com

出品作家 |

大野陽生、黒川弘毅、菅原玄奨、杉戸洋、高橋直宏、棚田康司、中野浩二、根本祐杜、舟越桂
前田春日美、三沢厚彦、水戸部七絵

ポリフォニックなプロセス+プレッシャー

まだ、美術という言葉を知らない頃に、それとしてではなく「何か」として美術を目撃した体験はないだろうか。私の場合、それは歴史の教科書でみたティームールの肖像であり、メヴレヴィー教団の図版であった。ティームール朝の始祖であったり、スーフイズムであったりという知識でそれらを見ていたわけではない。かといってそれらを絵として見ていたわけでもない（実際のそれらは思い返せばっきりとした線描画だったわけだが）。ただ、ただ、意識が引かれて目が離せない。瞬間の、遅く、重い、単純な体験。

—

いまにして思うと、この体験は既知を未知として出会う時間の繰り返しではなかったか。私がティームールと600年前に出会っていたとか、そういう話ではない。私たちは、美術という言葉を意識する前からそれぞれに「美的な何か」を抱えている。それとは知らずにそれだと確信的に出会う時間は、ある日突然やってくるということだ。そして、ここで付け加えたいのは、その出会いはひとつではなく、同時多発的な複数との出会いだということ。

—

私は、このことが私たちに美術をさせる原動力だと仮想したい。私たちは、知っていることが知らないことでもあるということを最初から知っている。そして、既知が複数の未知であること、その分裂を受け入れることの必要も知っている。それは、自身の中にある複数の自己を受け入れることに他ならない。「美的な何か」はひとつではない、自己の中で分裂した複数の声であろう。それらの声と対話をする方法、技術として美術はある。美術もまた複数の分裂する。私たちは分裂している。

—

展覧会では、上述の考えを示す試みとして数名の彫刻家による頭像（首像）を展示する。複数の声=自己を受け止める方法のひとつとして、私たちに既知なもののひとつである頭を様々な視点、角度から出現させる頭像（首像）彫刻に着目する。複数の声を受け止め、それをひとつの物体にまとめようとする行為から、不合理な断面の結晶が出現する。この行為を、仮にポリフォニックなプロセスと名付けよう。もうひとつの試みとして、3名の画家、彫刻家による肖像を展示する。絵画、ドローイング、映像と異なる現れをしているが、私たちに見えるのは分裂した自己がブレながら重なる姿であり、その姿は作家の技法への拘泥とシンクロする。壁（垂直面）から私たちに向かってくる肖像からは、複数の声が、技法という声帯を通した音圧=ポリフォニックなプレッシャーとして響いてくるだろう。

文責：富井大裕（はしっこ世話人）



菅原玄葵 「mob #2」 2020年 FRP 47×15×14cm



前田春日美 「水に印」 2021年 映像インスタレーション サイズ可変



水戸部七絵 「I am a yellow」 2019年 油彩、リネン、木製パネル 170×140cm